

シャンティ

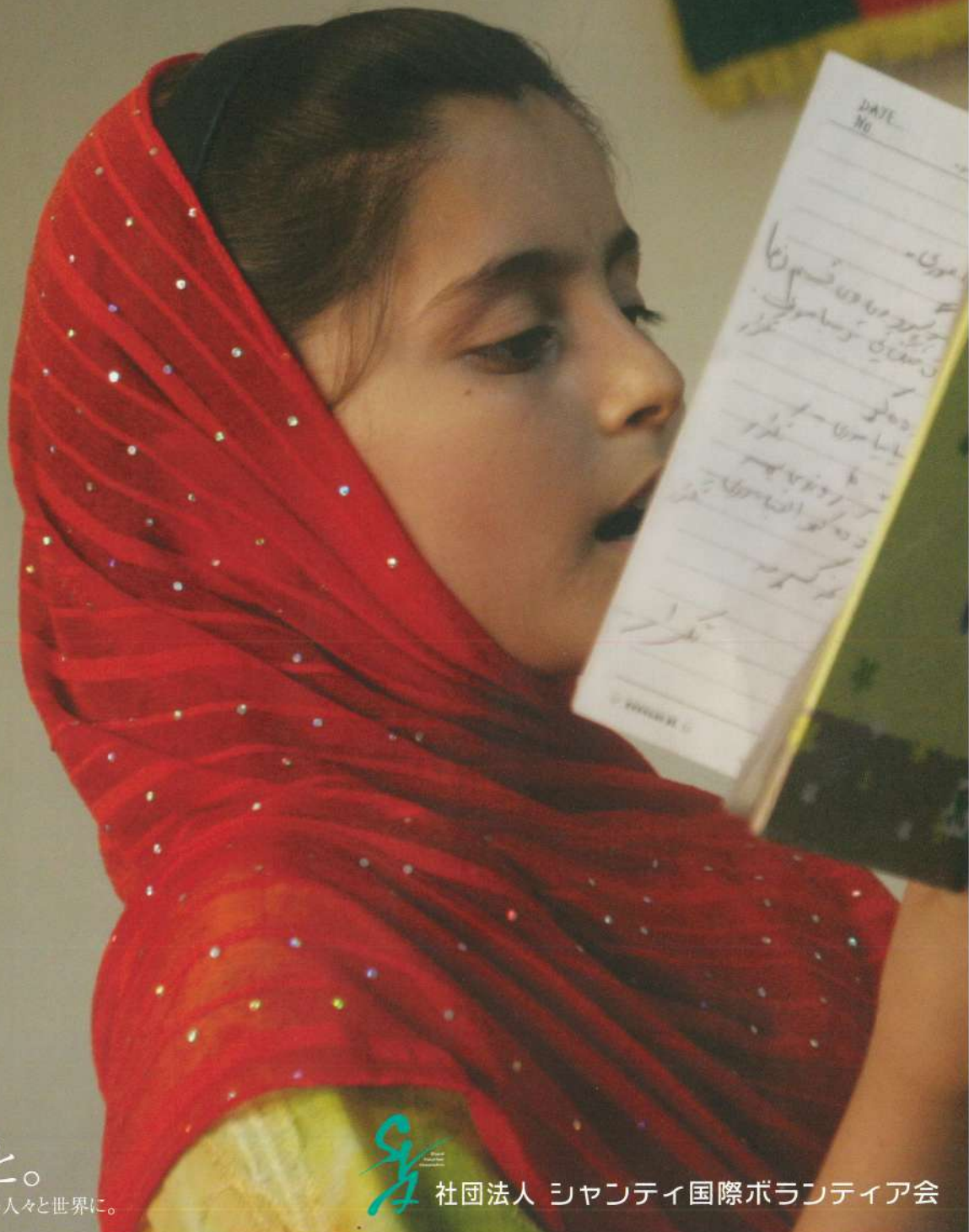
shanti

2008
冬
1月号

特集

SVAの人びと

活動を支える現地スタッフ



手を、とりあうこと。

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。



社団法人 シャンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

タイ: スラム地区の図書館
SVA Libraries in Thailand



- 1 クロントイスラム図書館は、SVAタイランド事務所の1階にあります。
- 2 みんなと絵本を読むのも楽しい。
- 3 図書館の常連、フックくん。
- 4 1日に何本も電車が走るクロントイ港に続く線路。ここも住民の生活の場です。

フックくん(5歳)は誰もが認めるやんちゃ坊主。クロントイスラム図書館の常連です。友だちの邪魔をしたり、絵本に落書きしたり、棚に飛びついたり。そして、最後はスタッフに叱られてシユンと落ち込んでいます。それでも毎日図書館に通ってきます。タイは、急速な都市化とともにスラム(貧困地区)が増加しています。およそ15万人が暮らしているクロントイスラム。その中には、ミャンマーやカンボジアからの出稼ぎ労働者も含まれます。スラムには経済の底辺におかれた人々が生活しているのです。

SVAの図書館は、子どもが安心していられる場所です。どんな境遇にいる子ども、タイ語がわからない子ども、いつでも好きな時に来て、あふれんばかりの好奇心を満たすことができます。そしてなにより、あたたかい図書館スタッフが子どもたちを待っています。

すべての子どもたちが、子どもらしく笑っていてほしい。それが私たちの願いです。

(SVAタイランド 松尾久美)

表紙: タラナ(詩)を朗読するアフガニスタンの少女 [撮影: 白鳥孝太]

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ(平和)な社会の実現をはかります。



道

巻頭言
みち

人材育成をとおして
活動の充実を 会長 若林恭英

2007年は日本国内において能登半島地震・新潟中越沖地震といった自然災害が続き、被災された方々の物心両面にわたる損失は計り知れないものがありました。SVAにおいても、被災者の視点に立った活動を念頭に支援にあたりました。特に各地から駆けつけられた若い曹洞宗の僧侶や大学生の方々と協働できたことは、阪神大震災以来の課題である、平常時のネットワークや現場での連携が生きたと言えるでしょう。

一方、海外においては、アフガニスタンでの外国人誘拐、ミャンマー国内民主化運動の軍事政権による弾圧、パキスタンの非常事態宣言といった事件も続きました。少なからず影響を被るアフガニスタン事務所やミャンマー(ビルマ)難民事務所は、東京事務所と緊密に連絡をとりながら、支援を必要としている多くの子どもたちのために活動を続けています。

こうした活動の原動力になっているの

は、子どもたちの無垢な笑顔と真剣なまなざしです。教育の機会に恵まれないが故にそのチャンスをつかみ取るうとする力は、むしろ支援をする側がエネルギーをもらっているかのようなものです。それは現代の日本社会が一番必要としているものかもしれません。日本の皆さまから会費や募金をお預かりして活動を行う者として、現地で得たこのエネルギーを還元できるよう広報に努めていかなければなりません。

年に一度、海外事業地を訪問し感じるのには、私たちが考える以上にSVAの活動の意義を彼の地の人々が認め、渴望しているということとです。図書館活動や学校建設、難民支援などそれぞれの活動の評価もさることながら、その過程で現地の人々と話し合い、相手を尊重して活動を進めるSVAの姿勢と、それを担うスタッフへの信頼が根底にあるのではないかと考えています。

今号の特集では、海外事務所の現地スタッフを紹介しています。彼らは日々、子どもたちに接し、現地の人々や関係機関と交渉し、現場の活動を支えています。2008年はこうした現地スタッフの人材育成を通して、将来の海外事務所自立化を視野に入れながら、活動の充実をはかっていきたいと考えています。

最後になりましたが、新しい年が皆さまにとりまして幸多き年になりますように。これからも皆さまとアジアの人々と共に、子どもたちのための支援を行ってまいりたいと思っています。

わたしが好きな絵本

my favorite book

わたしはレッ・ハウル。小学校5年生、13歳です。コンポントム州の農村に住んでいます。家族はお母さんと兄2人、姉3人です。お父さんは幼い頃亡くなりました。お母さんは0.5ヘクタールの田を耕し、お米を作っています。学校が終わって家に帰るとお母さんを手伝って、お米を炊いたり、料理に使う薪割りをします。

一番好きな教科は数学。買い物をするときや物を売るときに計算できるようになりました。休み時間は友達と縄飛びをしたり、図書室で本を読んだりします。

好きな絵本は『アンコールワットへ行こう』です。アンコールワットの絵を見ながら、いつか行ってみたいと思います。

将来は先生になりたいです。そうしたら家族の近くにいられるし、良い先生になって、たくさんの知識を子どもたちに教えてあげたいです。

(インタビュー: カンボジア事務所 鈴木晶子)



海外の3つの事務所で、活動に携わっているスタッフを紹介します。



ラオス 図書館担当 **ピッサマイ・シツパサー** (27歳)

私はルアン・パバーン県に生まれました。小さな村で両親は商店を営んでいたため、幼い頃は毎朝早くから遠い市場に母と出かけていました。9才の時、首都のヴィエンチャンに引っ越しました。今は父、母、兄、姉、姪甥など19人で住んでいます。窮屈に感じることもあります。家族と一緒にいられるのは幸せです。高校卒業後、大学で3年間経営学を勉強しました。ラオスではだれもが学校に

行けるわけではないので、学校で勉強ができるのはうれしかったです。本が好きだったのでSVAの図書館活動に惹かれました。活動については詳しく知らなかったのですが、面接で話を聞いた時に「ここで働きたい」と強く思ったのを今でも覚えています。私が読み聞かせをする物語に聞き入ってくれる子どもたちの顔を見ていると、うれしくてたまりません。「くつたのん

だわらった」、「はらべこあおむし」などの絵本は、内容もおもしろく、子どもたちの生き生きとした反応が返ってきて、私自身も好きな絵本です。事務所や図書館事業課の会議では、みんなで活動のアイデアを出し合ったりします。いい同僚に恵まれて感謝しています。ラオスの地方に住む子どもたちの多くは、朝起きて畑に行き、1日中農業の手伝いをしています。そのような子どもたちに、教育の大切さや絵本の楽しさを伝えていきたいと思っています。

(インタビュー 鈴木淳子)

ミャンマービルマ 難民事業 図書館担当 **プリダラツ・トムタサナディー** (25歳)

難民キャンプの子どもたちは 図書館が大好きです

出身は北タイのターク県にあるカレン人の村です。高校卒業後、専門学校で2年間英語を学び、メーソットにあるカレン人青年団体でボランティアをしている時、母と妹が病気になるしました。治療代を補うために仕事を探していると、外国人の同僚からSVAがスタッフを募集していることを聞き、本が好きだったので応募しました。

4年前、SVAで働き始めた頃、大きな声で読み聞かせをしたり、振りをつけて歌ったりすることが恥ずかしくて上手にできませんでした。でも今は読み聞かせやゲームをして、子どもと一緒に大きな声で笑ったり、自分も楽しめるようになりました。

展させ、年2回の人形劇公演だけではなく、絵本の読み聞かせや演劇を指導したいと思っています。また図書館の本が紛失しないよう取り組んでいきたいです。キャンプでは最低限の生活物資は配給されますが、教科書や絵本は不足しているため、そういう事情も背景にあるのだと思います。

難民キャンプに図書館ができて、子どもたちは本を通してキャンプの外の世界を知れるようになりました。彼らは図書館が大好きです。子どもたちは家に帰ると図書館で覚えたおはなしや歌を家族に聞かせたりしています。子どもたちの成長を間近に見られることがうれしいです。08年は青少年ボランティアの活動を発

た。寝るときは机をベッド代わりにし、毛布も蚊帳も枕もありません。当時学校はありませんでした。教育は悪とされていたからです。ポルポト時代に亡くなったカンボジア人は200万人とも言われていますが、私の家族は全員無事で、解放後に再会することができました。87年から7年間は奨学金を受けて旧ソ連(現ウクライナ)に留学し、土木学の修士号を取得しました。カンボジアに帰国後、SVAのスタッフになりました。その年に結婚し、現在は11歳の娘と7歳の息子がいます。

たのでお坊さんとの会話に苦労しました。出張が多く悪路を長時間移動したり、家族と離れる時間も長いです。でも幼少の頃に内戦、ポルポト時代、貧困を経験してきたので、カンボジアの教育支援に貢献できることが何よりうれしいです。カンボジアは学校建設の基本計画がないので、木を植えずに校舎を建てる時に伐採しなければならなくなったり、校庭がなく子どもが運動できないという問題も起きます。学校環境を良くするには、立地条件に応じて校舎の位置、植林の場所、校庭の広さなどの計画をまず立てることが必要です。08年はこの基本計画を明確にし、また自分の技術やリーダーシップをさらに向上させたいと思います。

(インタビュー 加藤美生)



カンボジア 学校建設担当 **スー・サミー** (39歳)

子どもたちの支援に 貢献できることがうれしい

68年、ベトナム国境に接するプレイベン州で生まれました。6歳の頃に内戦が悪化し、教員だった父は母と6人の子どもを連れてプノンペンに移り住みました。その1年後、ポルポト時代(75-79年)が始まり、カンボジアは悲惨な時代にはいりました。

7歳の時、私と兄弟は両親と引き離され、子どもだけを集めた労働グループにばらばらに入れられ、ダムを作るのに必要な砂を運ぶ水牛の世話させられました。労働は厳しかったにもかかわらず、食べるものはなく空腹の日々が続きました。

私の仕事は、学校建設対象地の調査や、校舎の設計図を描いたり、工事のモニタリングなどです。海外生活が長かったので最初は村の住民と話をするのが苦手でした。特に仏教用語をあまり知らなかつ

た。寝るときは机をベッド代わりにし、毛布も蚊帳も枕もありません。当時学校はありませんでした。教育は悪とされていたからです。ポルポト時代に亡くなったカンボジア人は200万人とも言われていますが、私の家族は全員無事で、解放後に再会することができました。87年から7年間は奨学金を受けて旧ソ連(現ウクライナ)に留学し、土木学の修士号を取得しました。カンボジアに帰国後、SVAのスタッフになりました。その年に結婚し、現在は11歳の娘と7歳の息子がいます。

SVAの活動を支える現地スタッフも、それぞれに内戦や貧困を経験してきました。その中で学校に通い身につけた知識や技術を、いま子どもたちの教育支援のために生かして、自分の国や民族に貢献しています。また彼らは、祖国を想うひとりとして、日本の皆さまへの感謝の気持ちを強くもっています。2008年はこうした現地スタッフがさらに能力を高め、海外の現場と日本のかけ橋となって、活動を充実させてくれることを期待しています。



(インタビュー 鈴木晶子)



「かけ橋」になれるよう 私たちもがんばります

東京事務所 海外事業課

日本国内で現地の教育事情や生活状況などをお伝えし、問題解決のためにできることを提案させていただいています。図書館事業や学校建設、アジア子ども奨学金などの指定募金は、会費やアジア子ども募金と同じようにSVAの活動を支援しています。学校建設や絵本出版のように大きな取り組みが必要な事業は、複数の方のご協力をあわせて完成するものや、数年かけてバザーや募金活動などを続けられご支援いただくものもあります。ご関心のある方がいらっしゃいましたら、お気軽にご連絡ください。各国担当がお話をうかがい説明させていただきます。



2008年1月からの海外事業課スタッフ
前列左から、課長の市川斉、タイ担当の藤川和美、ラオス担当の佐久間美穂。後列左から、アフガニスタン担当の山本英里、カンボジア担当の鎌倉幸子、課長補佐兼ミャンマー(ビルマ)事業担当の伊藤解子。



法蓮寺の支援で建ったカラタック小学校
1100人の女子生徒が通う

待ち望まれた 3つの小学校が完成

2007年度建設していたカラタック、サイド・ジャマルディン、コットの3つの小学校が完成し、11月中旬に贈呈式が行われました。アフガニスタンでは当初より治安の問題が心配されていましたが、地域住民の協力の下、工事は無事完了しました。SVAがアフガンの人々と文化を尊重し、学校建設後にも図書館活動の支援をすることなどを何度も話し合い、住民の理解と協力を得て進められてきた学校建設です。

政府発表によるとナンガハール州の就学率は約60%とされています。地方においては教室が足りずに屋外での勉強を強いられるなど、設備が整っていないこともあり、入学した子どもたちがまた隣国パキスタンの学校へ戻ってしまうという課題を抱えています。

贈呈式の模様は、全国ネットのテレビで放送されました。治安情報やテロ、誘拐などのニュースが多い中で、明るい話題を提供できてよかったと現地スタッフ



「とんでったバナナ」を演じる
神津副会長（中央）と訪問した皆さん

難民キャンプを SVA副会長らが訪問

11月6日、神津佳子SVA副会長ほか5人の支援者の皆さんがメラ難民キャンプを訪問されました。午前はカレン難民委員会から、第3国定住の影響や毎月1500人を超える新規難民に食糧配給がないなどの問題が説明されました。午後はキャンプ内の難民の家を訪問。様々な苦悩を抱えて国境を越え、キャンプに暮らす人々の生の声に触れ、難民の生活や内面を知る貴重な機会となりました。

その後は子どもたちの待っている図書館へ。あふれんばかりに集まった子どもたちは、カレンの舞踊と音楽で歓迎してくれました。特にカレン舞踊を初めて見た皆さんは「男の子も、女の子もかっこいい」と絶賛。続いて、キャンプ初訪問の会員、岡野雅代さんが軽やかな声で「夕方のおかあさん」「見上げてごらん夜の星を」を日本語で歌い、最後は「バナナン、バナナン、バナナア」というサビでおなじみの「とんでったバナナ」。

歌う岡野さんと、歌詞に登場する動物とバナナのやりとりを大型紙人形で操る訪問者の皆さん。始終笑顔ながらも、その目は真剣そのもの。子どもたちの目もパフォーマンスに釘付けで、最後は拍手喝さいが起りました。娯楽の少ないキャンプで、この日のパフォーマンスは子どもたちの記憶に残ったことでしょう。今後、図書館員たちが歌を真似て自分たちでやり始めるのではないかと期待しています。

(ミャンマーをこ難民事務所長 小野豪大)



5km先の隣村の学校に通う子どもたち
雨季にこの川は幅100mにもなる

1年生の35%が 落第する理由

パーンラオ村は首都ヴィエンチャンから南に800kmのサラワン県にあります。10月、日本の外務省の支援で村に新しい校舎が建設されました。新校舎は3教室。瓦屋根とレンガの壁が子どもたちを暑さや激しい風雨から守ります。人口500人の小さな村ですが、村人が協力して木材を提供したこの学校は村全体の誇りです。校舎が新しくなって、それまで100人しかいなかった児童は113人に増えました。贈呈式はパー

シーの儀式、昼食会、踊りと続き、村をあげて盛大に行われました。この小学校、実は3年生までしかありません。4年生以上は5km離れた隣村まで通います。雨季には泥でぬかるむ道を小学生が通うのは簡単ではありません。サラワン県はラオスの中でも就学率が特に低い県です。県の調査では学校に通っている子どもは学齢期の児童の77%。1年生で落第する子どもは35%のほりります。原因としては、この地域は

少数民族の割合が高く経済的に貧しかったり、学校や先生、教科書が足りないこと、先生が教え方を十分に習得していないことなどがあります。特に先生の不足は深刻で、ラオスにある約8000の小学校のうち41%は先生が1人しかいません。1人でも多くの子どもたちが安心して学校に通えるよう、ラオスの教育事情を考慮した事業を進めています。

(ラオス事務所 高橋久夫)



ボランティアこぶの会が
2007年に建てた新しい小学校

2007年は12校の 小学校を建設

心地よい風が吹き始めた11月。5月から始まった雨期の終わりです。この時期は半年以上かけて建設してきた学校が完成し、ご支援くださった日本の方々から贈呈式にいらっしやいます。今年度は12棟を建設し、1456名の子どもが新しい校舎で学べるようになりました。今まで雨漏りがしたり、穴だらけの壁の粗末な校舎で勉強してきた子どもたちは、新しいコンクリート造りの校舎ができる学校に通いたい、もつと

勉強したいという意欲が高まります。新しい教室は先生の声がよく聞こえ、黒板に書いた文字もよく見え、子どもたちが集中できるので、先生たちも教えるのが楽しくなります。今まで「暗い・危ない・環境がよくない」という理由で子どもを学校に通わせなかつた親は、子どもを新しい学校に通わせるようになり、村人たちは植林活動などの学校行事に積極的に参加するようになりました。

村全体が、日本から贈られた素晴らしい学校に感謝し、「自分たちの学校」という意識を強く持つようになりました。2008年度、学校建設の重点目標は、校舎だけでなく校庭や周囲も含めた学校環境全体の向上です。そのため基本計画の作成に取り組み、カンボジアの子どもたちが安心して学べる環境を提供していきたいと思います。

(カンボジア事務所 鈴木晶子)



ニコンの曲山氏から奨学金をうけとる中学生

秋の奨学金授与式を開催

11月3日、2学期最初の土曜日、バンコク地区の秋の奨学金授与式が行われ、市内4つのスラムから奨学生100人が集まりました。式にはスラムの住民委員長など地元関係者のほか、今年度から「アジア子ども奨学金」に支援を開始された株式会社ニコンの曲山健一氏が日本より参列されました。ニコンのタイ現地法人では8000人が働いています。そのご縁で社会貢献活動の一環としてタイの子

どもたちの支援を決定されました。曲山氏は「中高生だけでなく大学生も対象に、長期的な支援を考えています。勉強し得た知識が皆さんの将来を明るくし、きつと役立つことでしょう」と奨学生を励ましました。授与式ではSVAの舞踊教室に通っている子どもたちが伝統的な祝福の踊りを披露し、花を添えました。奨学生は式の後、周辺地域のゴミを拾う清掃活動に参加するなど、社会活動にも積極的に参加

しています。貧困や親の不在、障がいをもつ家族がいるなど困難を抱えた彼らが、奨学金によって自分の可能性を伸ばし、社会を変えるような人になってほしい。彼らのような教育の機会に恵まれない子どもたちが減るように。これからも奨学生の成長を見守っていききたいと思います。

(SVAタイランド 江幡むつみ)



上：意見交換、交流を通して新しい気づきがありました
下：ひとり劇を創作している曾根崎順子さん

湯布院発 SVA 代議員の集い



上：ジャイネパールでの様子
右：WISSENの佐藤さんご夫妻

CBS イベント 「小さな絵本の大きなチカラ」

10月27・28日に、大分・湯布院の自然豊かな地で初めての「SVA代議員の集い」が開催されました。

今回の集いは九州の代議員が中心となっており、集まったのは大人20名(代議員5名、理事2名、他会員・関係者)、子ども8名。会場となった「山荘・四季」は荒金先生が主宰される「子ども遊び場研究会」の施設で、小川が流れ、夏休みには子どもキャンプや家族連れで賑わいます。

初日は、まず荒金先生のユーモアあふれる講話。「社会が忘れかけている心豊かな生活を取り戻すこと。教育の原点は寺子屋です」という言葉が印象に残りました。その後は、代議員の有馬嗣朗氏、松尾哲雄氏による開発教育のワークショップ。様々な課題を解決していくためのプロセスを学び、地域活動の参考になる体験型の講座にみんなを取り組みました。

手作りの夕食会をすませた後は、荒金先生に長年師事されてこられた曾根崎順子さんによるアジアの民話の読み聞かせや影絵、ひとり人形劇。大人にとっても楽しい時間でした。続いてSVAの山本、中原スタッフによる、アフガン、ミャンマー(ビルマ)難民キャンプの活動で出会った子どもたちの話、ご自身の想いも伝わってきました。

2日目は、「SVAが教育支援に取り組んだ27年間を振り返る」と題して茅野事務局長より報告がなされ、その後は「地域活動とSVA」という内容で活発な意見交換が行われました。「地域で、代議員として、会員や支援者に求められること、できることは？」を中心に話し合い、限られた時間でしたが今までになく深い考えを共有できたと思います。

「テーマが大きすぎて無理があった」との意見も聞かれましたが、「私たちがすべきことが見えてきた」「地域で活動することは自らが動くこと」といった声が多く寄せられました。今回参加者の誰もが思ったことは、代議員・会員同士がこのような集いを通して支援の意義や目的を考へることが、活動の輪を広げ、ということだと思います。九州地区では来年度以降も引き続きこのような機会を設けていきたいと考えています。

全国の代議員、会員の皆さん、あなたの地域でも集うことから始めてみませんか？
(九州地区代議員 荒木正昭)

スタッフ日記 Staff Diary

ミャンマー(ビルマ) 難民事業 加藤美生の1日

6:30am 起床。簡単なヨガをしてシャワー。さっぱりしてからフィルターコーヒーを入れ、1日がスタート。

8:30am 出勤。ペーパードライバー歴9年を克服し、車を傷つけないよう朝からドキドキで事務所に向かいます。朝の難関、事務所前の細い橋を渡って、なんとか車庫入れ。

9:00am スタッフ15名が集まって朝のミーティング。「サワディー・ドンチャオ(おはようございます)」。タイ語の挨拶から始まり、連絡事項やスケジュールを確認。仕事は図書館活動に関すること全般。日本から届けられる絵本の選書や配布、メールによる事務所通信の発行、他団体との会議もあります。キャンプには週に1度程度行きます。

12:00pm 1時間前に、お手伝いのデュアンさんがスタッフにお店の注文を聞いて回ります。よく食べるのはクイティオ(タイ風ラーメン)やパッタイ(タイ風やきそば)。事務所の食堂でスタッフとテーブルを囲み、それぞれの昼食を味見し合いながら食事をします。

18:00pm 仕事を終えて、メーソットの町の一角でタイ人に混ざってエアロビクス。通りすぎる人々のもの珍しそうな視線を浴びつつ体を動かし、すっきりした気持ちで帰路へ。

タイ北部のメーソットに赴任して半年たちました。2007年4月まで青年海外協力隊員として2年間暮らしたタイ南部は、椰子や天然ゴム農園が広がる農村。そこに比べるとメーソットは、北に位置するだけあって南部より涼しく、欧米人、ミャンマー人、イスラム系タイ人など多様な人種が行き交う都市です。



大家さんの愛犬「ボーボー」



ミャンマー(ビルマ) 難民事業 事務所



スタッフと(右端が加藤)



クイティオ



キャンプの子どもたち



エアロビクスで汗を流す



タイ語の先生

ミャンマー(ビルマ) 難民支援にかかわり、イスラム教徒やミャンマー人、欧米人も多いメーソットに住んでみて、最近強く「自分が日本人であること」を意識しています。私と出会う人たちは私を通してどんな「日本人のイメージ」を持つだろう？自分自身を振り返り、日本や日本人について書かれた本を読むようになりました。

様々な「違い」が争いや差別を生み出しているこの世の中で、「違い」を超えて共生するにはお互いを理解し尊重することが大切なのではないでしょうか。難民支援を通してたくさんの人々と日々接し、お互いの違いを学びあう機会を与えてもらっているような気がします。

追伸 ミャンマー(ビルマ) 難民事業事務所では週1回、事業の状況や現地の話題をメールニュースでお伝えしています。配信希望の方はご連絡ください。
onotake@csloxinfo.com

19:00pm 1日の最後の難関、住んでいるアパートの車庫入れ。音を聞きつけた大家さんが出てきて誘導してくれます。大家さんの2歳の息子が「トイトーイ(後退)」と口真似します。

週に2回、タイ語教室に通って1時間半の個人レッスンを受けています。タイ語にも方言があり、今まで南部弁を耳にしていたので、会議や話し合いで使用される標準タイ語に苦労しています。ようやく事務所スタッフが話す言葉にも慣れてきたこの頃。イスラム教徒のタイ人の先生とは、授業の間にタイの文化やメーソットのこと、イスラムの習慣について話したりします。

休日の朝はゆっくり起きて掃除をし、インターネットをしたり、DVDを観たりして過ごします。メーソットには欧米人むけのカフェや、タイには珍しいパン屋もあり、時々立ち寄ります。マーケットに行くとソムタム(パパイヤサラダ)やカオニャオ(もち米)を買ったり、家で和風の煮物やパスタなどを作ることもあります。

文：加藤美生(かとう・みお)
愛知県生まれ。2007年5月にSVAに入職。ミャンマー(ビルマ) 難民事業事務所図書館活動コーディネーター。趣味はヨガ、旅行、スポーツ。タイのスタッフから「ミオー」と呼ばれている。



① ご寄付の税金控除について

当会は外務省より特定公益増進法人の認定を受けています。ご寄付は税金控除の対象になります。お手元にある当会発行の領収証を添付して確定申告を行ってください。

また、これまで数件のお問い合わせをいただいていた、ご遺産、相続財産の寄付についても、2007年12月6日に外務省の認可を受け、非課税扱いが可能となりました。大切なお遺産をアジアの子どもたちの教育支援にご寄付いただくことをお考えいただけます。法律上の手続きについては、専門家にご相談いただくか、当会までお問い合わせください。

担当 ◎ 経理・総務課 磯部正広

① SVA海外歳末募金実施中

1月31日まで受け付けています。募金の送り先は、下記の口座をお願いします。(手数料は免除されています。)

郵便振替 00100-7-559298

加入者名 SVAアジア子ども募金

募金と一緒に寄せたいメッセージはSVAスタッフブログ「ほっとシャンティ」でもご紹介しています。当会ホームページをご覧ください。

① 書き損じ年賀ハガキを送ってください

住所を書き間違えたり、余った年賀ハガキはありませんか。募金と同じようにアジアの子どもたちの支援に役立ちますので、SVAの事務所までお送りください。未使用の切手やハガキも受け付けています。

担当 ◎ 経理・総務課

① 人事

<異動> **白鳥孝太** アフガニスタン事務所から東京事務所 海外事業課・緊急救援担当へ (9月1日付)

鈴木淳子 アフガニスタン事務所から ラオス事務所へ (10月1日付)

<退職> **小林寛明** SVAタイランドスタッフ (10月31日付)

※2008年1月からのスタッフ体制は同封の別紙でお知らせいたします。

① 2008年度通常総会のお知らせ

2008年度通常総会を下記の通り開催いたします。おもな議題は2007年度の事業報告と決算についてです。総会での議決権は社員会員の皆さま全員にあります。社員会員の方には、3月初旬にご案内と総会資料をお送りいたします。

また賛助会員の方もオブザーバーとして出席し、傍聴・発言することができます。賛助会員の方は、同封の別紙ご案内をご覧ください。

総会後の懇親会は会員同士の交流の機会です。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

日時：2008年3月29日 (土)

総会 13:30～17:30

懇親会 18:00～19:30

会場：U1ゼンセン同盟本部

東京都千代田区九段南4-8-16

(JR総武線・地下鉄「市ヶ谷駅」より徒歩2分)

※社員会員、賛助会員の登録は、ご入会時に選択していただいています。同封の郵便振替用紙に記載しています。ご不明の点はお問い合わせください。

担当 ◎ 経理・総務課 磯部正広、河口尚子

① 絵本を届ける運動

2007年に皆さんの手によって訳文シールを貼り付けられた絵本が、2月にいよいよ海を渡ります!

東京事務所の絵本ドクターのボランティアさんによる点検、修正作業も追い込みに入っています。大切な絵本が傷まないように、とダンボールへの梱包作業も慎重に行います。

カンボジア、ラオス、ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ、アフガニスタンの各事務所に到着するのは、4月初旬を予定しています。

これまで皆さんに育てていただいた「絵本を届ける運動」は2008年でなんと10歳を迎えます!

今後も、アジアの子どもたちと絵本やおはなしとの出会いを、全国の参加者の方々と一緒に作っていきたくと願っています。どうぞよろしく願いいたします。

担当 ◎ 国内事業課 佐藤麻弥

東京事務所からのお知らせ

- 12月29日から1月6日まで東京事務所は冬休みをいただきます。資料請求、お問い合わせへの対応は1月7日以降になりますので、ご了承ください。
- 「シャンティ」2008年春号の特集は「スラムに生きる」を予定しています。発送は4月中旬です。2008年もどうぞよろしく願いいたします。



ご意見・お問合せ・入会の申し込みは

社団法人 **シャンティ国際ボランティア会**

〒160-0015

東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階

TEL 03-5360-1233

FAX 03-5360-1220

WEB <http://www.sva.or.jp>

E-Mail info@sva.or.jp

郵便振替 00150-9-61724

「シャンティ」は、FSC 森林認証紙 (SGS-COC-1773) にノンVOC インキ (石油系溶剤 0%) で印刷しています。

スタッフのこぼれ話 [2008年の抱負]

■ある人の詩。「ゆっくり歩いてみると、どんな物でも目に留まる。ふと見慣れたつまらぬモノが光放つてこころ打つ時は、一つの真実を見つけたのだ。一つの幸せを見つけたのだ。その日は尊い」。今年も大切なものを見つけていきたい。(茅野俊幸)

■以前、国内で教育の仕事に携わっていて、より厳しい環境に置かれていた海外の子どもたちのために何かお手伝いできないか、と考えたのをきっかけにSVAに入職しました。今、もう一度原点に戻り、全力投球していきたいと思っています。(市川直)

■SVAの活動に関わって18年。現地の人々、支援者の方々、そして家族との出会いからたくさんの学びと気づきをいただけてきました。縁で支えられてきた活動であることを忘れずに、今年も一助となれるようがんばります。(岡尚士)

■編集後記 2008年広報のテーマは「図書館活動の喜びを伝える」です。海外の子どもたちの幸せ、会員の皆さんのあたたかい気持ち、スタッフの感動を共有できたらと思います。4月に保育園にはいった子どもは言葉覚え、自分でご飯を食べ、滑り台も一人でできるようになりました。私は成長できたのかな、と振り返る12月です。(村田豊)